

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 印欧語の「目」

著者	風間 喜代三
出版者	法政大学教養部
雑誌名	法政大学教養部紀要. 人文科学編
巻	109
ページ	1-18
発行年	1999-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/3724">http://hdl.handle.net/10114/3724</a>

## 印欧語の「目」

風 間 喜代三

「目」をあらわす形の対応をみると、語幹が多様で、両数形が孤立的に残っている。こうした古い傳承があるにも拘らず、その再建形はあまり判然としない。その基礎は\*Hek\*- (Hは3) で、この語根はskr. *ikṣate* <\*Hi-Hk\*-se-, gr. (fut.) ὄψομαι, (Attic pf.) ὄπλωα などの「みる」という動詞に使われている。しかし動詞の対応は少ないし、統一がない。従ってこの形は、多くの身体名称と同様に、本来は名詞\*Hok\*-「目」であったと考えられる。またskr. *prátika-*, gr. *πρόσωπον*「顔」(\*proti-「(相手の) 目に対して」cf. oHG. *antluzzi*> *Antlitz*) のような合成語の存在も、この名詞の古さを物語っている。

そこでこの「目」をあらわす語の、各語派における語形成を検討してみよう。まずアリア語群のインド語派には、skr. *ákṣi*, (gen) *akṣ-nás* という、中性の*ásthi*, *asth-nás*「骨」と同じタイプの異語幹曲用の形がある。その語幹は記述的には-i/n-であるが、\*Hok\*-の仮定からは-es/s-を前提にする。この*akṣ-*は、*an-ákṣ-*「目が無い、盲目の」というヴェーダ語の合成形にも認められる。そしてこの*ákṣi*の両数形*akṣí*は、イラン語派のav. *aši*に対応している。<sup>(1)</sup> この*akṣí*という形のアクセントの動きから、これは*ákṣi*という-i-語幹に属するとは考えにくい。その証拠に、少し新しい形としてAV *ákṣini*という-n-語幹に基づく形がつかれ、不規則な*akṣí*は使われなくなる。ということは、アリア語族は*akṣ-*そのものを一つの子音語幹の名詞としてとらえ、これに両数の語尾が直接つけられたものとみていたといえよう。<sup>(2)</sup>

それではskr. *akṣ-*に仮定される-s-語幹を他の語派に求めようとすると、それはスラヴ語派のocs. *oko*の属格*očese*に認められる。因みに、この「目」の属格は、*uxo*「耳」の属格*ušese*に平行している。そしてこの「耳」は、lith, *ausis*, lat. *auris* (*aus-cultō*「聴く」), goth, *auso*などの対応からみて-s-語幹が想定されるから、「目」はこの「耳」の形に倣ったと考えられる。なぜなら、*oko*には古い写本に*oka*という、現代のロシア語と同じ属格形が指摘されるからであ

る。<sup>43)</sup> 従って、このスラヴ語の形をもってアリア語派の「目」の-s-語幹の傍証とすることには疑問がある。

つぎに問題の両数形と-i-語幹との関係を見ると、スラヴ語には両数形にuši「耳」と並んでočiという形が専ら使われている。このočiは-s-語幹でないことは明らかで、むしろ-i-語幹の可能性が高い。そこで隣接するバルト語派をみると、lith.(f) akis, (gen.) akišsがausis「耳」と並んでこの語幹に属している。しかしこれは本来のものではなく、ここでも両数形aki, ausiから、逆に-i-語幹がつくられたと推定されている。スラブ語の(dat.-instr.) očima, ušimaのような-iも同様である。<sup>44)</sup> 従ってočiというkの口蓋化を示す形は、Meilletが指摘する通り、語幹接尾辞のない中性の\*Hok\*-に、直接両数の語尾(-iH)がつけられたものと解釈されよう。

アルメニア語の「目」も、単数akn, (gen.) akanはunkn「耳」と同じ-n-語幹のように思われるが、複数形は不規則で主格のač'k'(は帯気音を示す。-k'は複数の語尾)のčは後続する前方母音を予想させるから、ここにも-iまたは-iが あったと考えざるをえない。<sup>45)</sup>

現在の英独語のeye, Augeの関係するゲルマン語派のもっとも古い形はgoth. augoであるが、これは属格auginsから-n-語幹で、インド語派にみられた異語幹曲用の-n-が生きている。しかしここでも\*o>au-は不規則であり、auso「耳」のau-の影響を考慮しなければならない。

名詞の曲用に両数の範疇を残している中央アジアのトカラ語にも、既述の「目」の対応が生きている。それは(A) ak, (B) ekであるが、両数形はašäm, eš(a)neと、ここでもkの口蓋化が認められ、原トカラ語に\*ekjāのような形が想定される。しかしそれが-i-語幹であるのか、あるいは子音語幹にそのまま格語尾がつけられた形かは明らかでない。ここで-i-語幹を推定するのは、インド、バルト語派にみられるその語幹との比較によるにすぎない。<sup>46)</sup>

これまでにふれてきた語派の「目」に対応する形として、ギリシア語はホメロスにおいて両数形の(n) ὄσσεのほかに、(m) ὀφθαλμόςと(n) ὄμμαをもっている。この3形とも\*Hok\*-に関係があることは確かだが、そのうちのὄμ-μαの接尾辞-μαは明瞭で、専ら複数形でホメロスから悲劇に多用されている。従って詩語であるが、プラトンなど古典期の散文にもときに使われている。これにくらべるとὀφθαλμόςは、判然としない形である。方言形のὀκταλλος, ὀπτί(λ)οςをふくめて、そのφθ(κτ, πτ)とskr. kṣとの対応が早くから注目されてきた形だ

が、語形成としては lat. *oculus* と同じ接尾辞-l-(ὄφθ-αλ-μός)を示している。これはインド、ゲルマン語派のもつ-n-語幹を考慮するとき、ゴート語の *sauil* と *sunno* 「太陽」、あるいは lat. *sōl* とドイツ語の *Sonne* 「太陽」に似た異語幹の交替の名残りを予想させる。ホメロスでは専ら複数形で、*οὐκ ἴδον ὀφθαλμοῖσι / νύκτα δι' ὄρφναιην* 「真暗な夜の故に彼らは目にはみなかった」(II, 10.275-76) とか、*οὐδ' Ἄχιλλῆος / ὀφθαλμούς εἴσεμι* 「私はアキレウスにはまみえない (目には入っていく)」(II, 24, 462-63) のように、「目」そのものよりはやや広い「視野 (に入る)」とか「面 (とむかう)」のような意味で好んで用いられている。

ホメロスにおいて *πήγχεε* 「腕」と並んで中性の両数形として多用されている *ᾄσσε* (主・対格) は、上にふれた2つの「目」よりは古く、孤立している。というのは、この形につけられる形容詞は、*ᾄσσε φαεινά* 「輝く目」のように、一般に複数形である。動詞も *τῷ δέ οἱ ᾄσσε λαμπέσθην* 「両眼は輝いていた」(II, 15, 607) というきまった表現にのみ両数形がみられるが、その他は複数形が用いられている。これは、*ᾄσσε* という形がすでに両数という範疇に属することが忘れられ化石化しつつあったことを示唆しているといえよう。これをさきにふれた skr. *akṣī*, ocs. *oči*, lith. *akì* といった両数形との対応と -ss- を考慮して解釈すると、まず \*ok<sup>w</sup>i が想定され、これにさらに -e という両数をあらわす語尾が加えられたと考えなければならない。つまり、少なくともギリシア語のなかでは (f) \*wok<sup>w</sup>-iH (この場合 H=ə) > ᾄσσα 「声、噂」に似た過程の変化が予想される。<sup>(7)</sup>

これに対して、ギリシア語では -ie という連続は口蓋化を起さずに \*okie のままに残る可能性が認められるところから、子音語幹の両数形 \*Hok<sup>w</sup>-iH (H=ə<sub>1</sub> > gr. e) をそのまま *ᾄσσε* に結びつけようとする解釈が提唱されるに至った。<sup>(8)</sup> この説は、ギリシア語の形が2つの両数の語尾をふくむという仮定を避けて、他の語派との対応により近づくことができるという点で、従来の理解より有利である。しかしその際に、ギリシア語を除くすべての語派が語尾 -iH > -i であるのに、ギリシア語だけが -je を仮定するという違いの説明が求められよう。

skr. *ákṣi* と gr. ὄφθαλμός の対応は、同じ2つの語派の *ῥkṣa-* と ἄρκτος 「熊」に代表される、いわゆる Thorn 問題としてくり返し論じられてきたが、この「目」にはその他にも特異な点がある。一つは、さきにあげたように、ὄφθαλμός に対して方言形 *ᾄκταλ-λος*、さらに *ὀπιίλ-(λ)ος* という -κτ-, -πτ- を示す形をもつこと、もう一つは、*ᾄσσε* という形の共存である。この形は、既述のよう

に対応の上からはskr. *ákṣi*をak-ṣ-iと分析することを求めている。従ってこの「目」に関係する2つの語派は、一方ではkṣとφθ (κτ, πτ)の対応をなんらかの仮定によって許しながら、他方ではその分離を要求していることになる。このような矛盾をふくんだ例は、Thorn問題の対応のなかでも珍らしく、そこにこの語彙の特異さが感じられる。<sup>(9)</sup>

既述の\*Hok\*-「目」に関係のない語派は、アナトリアとケルトである。前者に属する(n. pl.)hitt. *šakuwa*-「目」は、その派生動詞*šakuwāi*-「みる」とともに、現在の英独語の*see, sehen* (古くは*seōn, sehan*)をふくむゲルマン語のgot. *saihwān*「みる」、即ち\**sek*\*-「ついていく」(skr. *sácate*, gr. *ἔπομαι*, lat. *sequor*, lith *sėkti* etc.)に関係づけられてきた。<sup>(10)</sup>しかし形と意味の両面からみて、同じ言語の*šak(k)*-「知る」(3. sg. *šakki*), *šagāi*-「兆し」との関係も否定できない。<sup>(11)</sup>さらにもう一つの可能性として、このヒッタイト語の形もなんらかの形で先にふれた\*Hok\*-と結びつけられないかという仮定が考えられる。

この語源解釈には-ak-の前にあるhitt. *š-*の説明が必要で、そのためにはs-movableを予想しなければならない。<sup>(12)</sup>しかしそれでは安易すぎるとすれば、新しい語根の展開が求められる。Oettingerの示した\**seH-k*\*-/sH-ek\*-(Hは3)>\*Hok\*-の交替の仮定は、その一つの試みである。それは、つぎの3段階にわけられる：

- (1) Uridg. \**Hék*\*-iH>*Hók*\*-jə>gr. *ὄσσε*
- (2) Voruranat. \**sHék*\*-eH>heth. *ság(u)wa-*, luw. *dāwi*-「目」
- (3) Uridg. \**SeHg*-‘erfahren’ (Hは2), heth. *šakk-/šekk*-‘wissen’, *šagāi*-‘兆し’, lat. *sāgīre* ‘かぎつける’

ここで問題の「目」のs-の有無について、多くの語派が\*sH->H-に対して、ヒッタイト語がs-をもつことに対して著者は、*šakki, šagāi*-<*seH-g->sā-g*のs-の影響を認めるとともに、luw. *dāwi*-が語中の-g-の消失と、語頭の子音の存在を仮定させるものと説明している。この仮定は、ヒッタイト語の「目」を語根\**sek*\*-「ついていく」ではなくて*seHg*-に結びつけることと同時に、他の語派の\**Hok*\*-「目」をもこの対応にくみ込もうとするもので、その意味では注目に値するが、s-については同じ問題が残ってしまうことを認めざるをえない。そこにこの語源解釈の難点がある。<sup>(13)</sup>

このようにみえてくると、印欧語の「目」をもたないのはケルト語派だけとい

うことになる。これに属する古アイルランド語の(f) súil <\*sūli- 「目」は、明らかに \*seHwel-/suHel- (skr. svār-, sūrya-, gr. ἥλιος, lat. sōl, goth. sauil, ocs. slŭnĭce etc.) 「太陽」にはかならない。<sup>(14)</sup> 「目」と「太陽」の関係は, sūrāya viśvácakṣaṣe 「すべてのものをみる太陽のために」(RV 1, 50, 2) のような表現にも認められるし, gr. ὄμμαは天上の「目」として「太陽」に用いられるなど, 非常に密接なものだから, この轉意は容易に理解される。<sup>(15)</sup>

しかし他のケルト語をみると, ウェールズ, ブルトン語の, súilに対応する haul, heolは, 母音階梯の違いはあるがいずれも「太陽」をあらわしていて「目」ではない。そして「目」には, それぞれlygad, lagadという\*leuk- 「輝く」(skr. lócate 「みる」, locana- 「目」, gr. λεύσσω 「みる」, lat. lūceō 「明るい(動詞)」, lūx 「光」, goth. liuhaθ 「光」 etc.) に属する形をもっている。つまり, ケルト語族は \*Hok\*- 「目」を失って, 内部で「太陽」と「光(輝く)」からそれを補ったわけである。しかし古い「目」の記憶がこの語派から完全に失われたわけではない。なぜなら, 古アイルランドとブルトン語に enech, enep 「顔」という形があり, これが同じ意味をもつ skr. ánika-, av. ainika- という \*Hk\*- をふくむ合成形と対応するからである。<sup>(16)</sup>

このケルト語の「目」の分布は, 「太陽」との交替はいちおう認められるけれども, なにか異常さが感じられる, Szemerényiは語源研究の原則を論じた研究のなかでこの異常さに注目し, これを解決するために, さきにふれた英独語の see, sehen の属する語根 \*sek\*- によってアイルランド語の súil <\*sūli- <\*suxli- <\*suk\*-li- <\*sok\*-li- を説明すると同時に, 詩語である rosc という語源不明の形をも \*pro-sk\*-o によって解明できるとしている。<sup>(17)</sup>

このように「目」は基本語彙であるにも拘らず, その対応をみると, 両数形が孤立的に残されている反面, 語幹の構成はさまざまである。また goth. augo に代表されるゲルマン語の形のようになり, \*Hok\*- の正確な音対応とはいえないけれども, 無関係とするほどには形がかけはなれていないものもふくまれている。gr. ὀφθαλμόςも同様で, その成立は不透明ながら, οφ- は同じ語派の ὄσσε, 動詞の ὀφθαί, ὀππωπαの οπ- に共通する要素である可能性も否定できない。なぜこのような微妙なずれが「目」の形にみられるのだろうか。この疑問について Meilletは, la superstition du mauvais oeil からくる言葉のダブーによるものだと説明している。<sup>(18)</sup>

実際にスマトラ周辺においては、狩りのシーズンの間は目について語ることが禁じられているという。アイルランド語にみられた「太陽」と「目」の転換、ケルト語における印欧語の古い「目」の消失には、なんらかのこうした動機が働いていたのではないか。Meiletはまた古代イランのゾロアスター教における「目」の語彙の2つの区別についてもふれている。この宗教では、すでに指摘されている通り、多くの語彙がアフラマズダーとダエーヴァの善悪の2派にわかれて使用されている。「目」についても、skr. *ákṣi*に対応するav. (dual) *ašī*は、賢き主の教えを破壊して、「その両目で*ašībyā*牛と太陽をみんながために（生き残らんために）もっとも悪いことを説いた者」(Yasna 32, 10)の「目」である。これに対して賢き主に属するものたちの「目」は、(n) *čašman-*である。これは古ペルシア語の*čašma*と一致するイラン語派の「目」であり、「聖き心の行いと言葉をもつ賢き主をみた目*čašmaini vyādarəšəm*, (Yasna 45, 8)である。そしてこれ以外にもアフラマズダー派は、av. *dā(y)-*「みる」、skr. *dīdh(i)ye*「認知する、考える」と同じ語根に属する(n) *dōiθra-*と*daēman-*という2つの「目」をもっている。<sup>(19)</sup>

因みにこのイラン語派の*čašman-*「目」に対応するインド語派の形としては、用例に乏しいがskr. *cákṣuṣmant-*「目をもつ」がある。これは*cákṣuṣ-*「目」に所有をあらわす接尾辞*-mant-*が附せられたものだが、この「目」は*ákṣi-*と並んで古い。にも拘らず、古典期の*nayana-*, *netra-*, *locana-*という同意語とともに、長いインド・アーリア語の歴史のなかでは*ákṣi-*に圧倒されて現在では忘れられつつある語彙である。この*cákṣuṣ-*の*cakṣ-*は「みる、あられる」(3. sg. *caṣte*)の意味の動詞語根として、ヴェーダ語から使用されているが、対応するav. *čašte*「教える」からさらにアーリア語族の時代にまでさかのぼると考えられる。この*cakṣ-*は明らかに重複形だから、恐らくskr. *kāśate*「あられる、輝く」との関係が想定されるが、アーリア語族はこの重複形を一つの固定した語根としてとらえていたに違いない。従って*cákṣuṣ-*も、本来は重複を伴う完了の能動分詞であったと推定されるが、音変化のうえからも*cakṣ-*を基につくられたとみるほうが無理がない。<sup>(20)</sup>

そしてこの*cákṣuṣ-*には*ákṣi-*との音のつながりが感じられる。av. *čašman-*から推して、*cakṣ(uṣ)-*は*ákṣi-*があらわす「目」そのものではなくて、本来はその目が光を發して対象をみ通す力をあらわす語であった。この2つの「目」が一つの文脈にあらわれる例が、医療の神であるアシュヴィン*Ašvin*双神を讃えた歌

(RV 2, 39, 5) にみられる。vátevaḥjiryá nadyēva rítir akṣi iva cákṣuṣá yātam arvák  
「年老いることなき風のように、川の流れるように、眼力を備えた両目のように、（双神は）下り来れ」。アートマン（自我）が宇宙の根本原理として世界を創造した過程を述べた古代インドの哲学書には、口から言葉、言葉から火が、鼻から息、息から風がでると並んで、「両目からcakṣibhyām眼力がcakṣus, 眼力から太陽がādityas（でた）」(Ait. Ār. 2, 4, 1)と説かれている。古代のアーリア語族にとって、目は対象を明るく照しながらみる力をもっている。だからみることによって、善であれ悪であれ、それを伝える可能性を秘めている。<sup>(21)</sup>

ものをみる力は目のなかに存在している。そこで既述のような「目」に対するタブーがあるとすれば、それは受動的にみるという働きではなくて、積極的にもを照らしながらみる過程のなかで発揮されるある種の力がそのきっかけになっていると考えられる。動物にしる人間にしる、目にはそれだけ特別な、相手を見通すような力があると信じられていたからである。そこでこの「目」についての迷信のようなもの、とくに「悪い目（兇眼）」とその表現に注目してみよう。

はじめにインド語派のもつアタルヴァ・ヴェーダの結婚の歌のなかから、その一節をあげよう。これは花嫁をのせた車が婚家に近づいてきたときに唱えられる言葉である。sám kāśayāmi vahatūm bráhmaṇā gṛhāirāghoreṇa cákṣuṣā mitriyeṇa / paryānaddham viśvárūpaṁ yádásti syonám pátibhyaḥ savitá tátkr̥notu //  
「（花嫁の）車を祈祷の言葉とともに、不吉でなく親しみの目をもって、家々にみつめさせよう。あらゆる形の（花嫁に）結ばれているものを、サヴィトリ（太陽）神が夫たちに喜ばしきものにせよ」(AV 14, 2, 12)。<sup>(22)</sup> ここでāghoreṇa cákṣuṣā「不吉でない目をもって」という表現は、直接にはkravyāde ghorácakṣase「不吉な（恐ろしい）目をもつ（-cakṣase=cakṣuṣe）, 屍体を食らうものに」(RV 7, 104, 2), durhárdaś cákṣuṣo ghorát ... naḥ pāhi「心悪き（敵）の不吉なる目から我らを守れ」(AV, 9, 6) に対するもので、花嫁を迎える家の人々の「悪い目」の恐ろしさを示唆している。因みにまた、この詩句にみられるbráhmaṇā「祈祷の言葉とともに」は、その聖なる力をもって「悪い目」をふくめたあらゆる敵の呪いをかわすvárma māmántaram「わが心のうちの防御」(AV 1, 19, 4) となる。

夫の家の者たちとは逆に、花嫁が夫に不吉な目をむけると、その夫は短命に終ると信じられていた。そこで詩人は花嫁にむかって歌っている。ághoracakṣur ápatighny edhi śivá paśúbhyaḥ sumánāḥ suvárcāḥ / vírasúr devákāmā syoná śám no bhava dvipáde śám cátuṣpade // 「不吉な目をもって、夫殺しとなるな。家畜にやさしく、好意をもち、光彩に富み、男子を生み、神を敬い、喜ばしく、我らが二足のものに幸福を、四足のものに幸福をもたせ」(RV 10, 85, 44, 辻訳 244)。古い家庭要綱書の規定によると、婚礼の際にこの歌を伴って ájyalepena cakṣuṣi vimr̥jita 「(花嫁の) 両目に聖なるバターを塗るべし」(Śāṅkhāyana Gr̥hyasūtra 1, 16, 5) とある。このバターは活力の象徴とされ、清めと同時に悪からの守護を約束するものだからである。<sup>(24)</sup>

人間だけでなく禽獣の「悪い目」も、古代のインド人に恐れられていた。だから吉兆を願って行われる鳥占いに当って、その鳥は「悪い目」を避けなければならない。「鳥よ、もしお前が吉兆を示すもの sumāṅgálas ならば、いかなる逆の目も abhibhá 決してお前をみつけないことのないように」(RV 2, 42, 1, 辻訳 381) と詩人は祈っている。この abhibhá は、いわば「逆光」であり、吉兆をつぶす「悪い目」である。こうした祈りは、ときには水のようなものにまで唱えられる。祭式に使う水、客人の足を洗う水、沐浴の水に「悪い目」が注がれてはならないからである。「水よ、吉祥の目をもって śivéna cákṣuṣā 私をみよ、吉祥なる体をもってわが皮膚にさわれ」(AV 1, 33, 4)。

不幸にして「悪い目」の呪いをうけたときには、これを解かなければならない。またその恐れがある人には、守りの護符が求められる。つぎの詩句は、ジャンギダという薬草からつくられた護符にこめた魔除けの言葉である。durhárdaś tvám ghorám cákṣuḥ pāpakṛtvānam ágatam / táṁstvám sahasracakṣo pratibodhēna nāśaya paripāṇo 'si jangiḍaḥ // 「悪き心(敵)の不吉な目を、せまり来た悪業をなしたるものを、お前は、千の目をもつものよ、これらのものを慎重に破壊せよ、ジャンギダお前はくまなく守るもの」(AV 19, 35, 3)。<sup>(24)</sup> しかしヴェーダ社会には、「悪い目」をもって魔法を行い呪いをかける多くの kṛtyākṛt-「魔術師」や yātudhána-「妖怪」がいた。これを見破り退けるには、アグニ神のような神の力に頼るよりなかった。この神はジャンギダと同様に「千の目をもって羅刹(悪霊)を駆逐する」(RV 1, 79, 12) し、tikṣéna cákṣuṣā 「鋭い目をもって祭式を守り」(RV 10, 87, 9)；辻訳 92) 神々と人間とを結びつける力をもっていると同時に、人間の心のすべての悪を払いのけることができる

(RV 10, 164, 3; 辻訳 385) と信じられていたからである。これは正しく火の神アグニの目の力 *cákṣuṣ-* にほかならない。

インドからギリシアに注目すると、神話世界ではまずゴルゴー Γοργώ, (pl.) Γοργόνες が想起されよう。ガイア「大地」とポントス「海」の間に生まれた2人の兄妹ポルクユスとケトは、結婚して3人のグライアイ「老婆」と3人のゴルゴーを生んだ。3人のうちメドゥーサ（「支配する女」）だけは不死でなかったために、女神アテネの助言に従ったペルセウスによって、その首をうたれた。彼女たちは西方の死者の国ヘスペリスの園に住み、頭に蛇をからませ、猪のような耳をもち、黄金の翼をそなえ、その手は青銅という魔女で、その顔を一目みたものは息が絶え、石になってしまった。そのためペルセウスは、輝く楯に映った姿によってメドゥーサの首をとったといわれている。

このゴルゴー、即ち γοργός 「(眼差しの) 恐ろしい」 女たちは、本来はギリシアの地の古い大地女神であり、女王ペルセポネーのいる地下の霊界にいる魔女であったと考えられる。そしてホメロスのころにはすでにその「悪い目」の力は逆用され、一種の *ἀποτρόπαιον* 「魔除け」に利用されていた。女神アテネのアイギスにつけられた Γοργαίη κεφαλή δεινοῖο πελώρου 「恐ろしい怪物ゴルゴーの頭」(II, 5, 741, cf. Od. 11, 634) は有名である。戦いにのぞむアガ멤ノンの楯の上にもゴルゴーの首がつけられている。τῆ δ' ἐπὶ μὲν Γοργῶ βλοσυρῶπις ἔσπεφάνωτο / δεινὸν δερκομένη, περὶ δὲ Δεῖμός τε Φόβος τε。「その上には不気味な目をもち、恐ろしくみつめるゴルゴーが飾り、その周りに恐怖と潰走も(いる)」(II, 11, 36-7)。戦場を駆けめぐるトロイア方の将ヘクトールをホメロスは、「ゴルゴーの目をもって」と形容しながら、つぎのように描いている。「Ἐκτωρ δ' ἀμφιπεριστρώφα καλλίτριχας ἵππους / Γοργοῦς ὄμματ' ἔχων ἠδὲ βροτολοιοῦ ἄρηος。「ヘクトールは美しい立てがみの馬をあちこちにむけた、ゴルゴーの目、あるいは人殺しの神アレスの(目)をもって」(II, 8, 348-9)。悲劇詩人アイスキュロスは「縛られたプロメテウス」Prometheus desmotes のなかで、このポルクユスの娘たちのことを、プロメテウス自身に語らせている。πέλας δ' ἀδελφαὶ τῶνδε τρεῖς κατάπτεροι, / δρακοντόμαλλοι Γοργόνες βροτοστυγεῖς, / ἄς θνητὸς οὐδεὶς εἰσίδων ἔξει πνοάς。「その近くには彼ら(老人グライアイ)の3人の翼をもった姉妹、人々がいやがる、蛇の髪をもつゴルゴーたちがいる。それをみたら、いかなる人間

も息をすることはないだろう」(798-800)。ここでδρακοντό-μαλλοι「蛇の髪をもつ」という合成形がゴルゴアの形容に使われているが、その前分δράκων「蛇」は、現在の英語のdragonなどの源の語である。そしてこの形は、gr. δέρομαι「みる」の語根\*derk-の-n-語幹の派生形であることは、その女性形δράκαινα<\*drakan-iaからも明らかである。従って、この怪獣の名も「みる」ことの恐ろしさ(δεινά δ' ὀφθαλμοῖς δρακεῖν「目にみるに恐ろしい」)アイスキュロス「慈みの女神たち」Eumenides 34)に由来していると考えられる。とすれば、このδρακοντόμαλλοι Γοργόνεςという表現は、みすえる目の恐ろしさを二重にあらわしていることになる。<sup>(36)</sup>

それでもゴルゴアについては、その眼差しの恐ろしさだけが強調され、悪いとか不吉という形容はみられない。既述のように、その奇怪な形相は逆に魔除けになって破風などにも描かれ、現代ギリシアにまでその迷信は生きていくらいだから、この魔女の目には底意地の悪さは感じられなかったのだろう。しかしギリシアにもインドと同じ「悪い目」がなかったわけではない。

プルタルコスが得意の食卓談義のなかで、「悪い目の魔術を使う καταβασκαίνεινといわれている人々について、(Moralia 680 c 以下)という章をもうけて、恋をしている人の目の働きとか、父親の目を嫌う母と子の例、あるいは黄痘病の人が千鳥をみると、その鳥が患者の目の放射を吸収してしまっ、て、病気が治るといった話を傳えている。そこでは「悪い目をもつ」という表現にβάσκανον ἔχειν ὀφθαλμόν(680 c)という表現を使っている。そしてこの「悪い目」から身を守るには、「魔除け」προβασκάνιον(682 a)が必要で、これはおかしい顔をしたものらしく、これが千鳥同様に「悪い目」をひきつけてしまうのだという。このβάσκανονとその一連の語は、とくに「悪い目」を使う人について用いられる形である。プルタルコスも、例えばエジプトの女神イシスが懐妊したときにつける「お守り」にはφυλακτήριον(378 b, φυλάττω「守る」)を用いているし、それ以外にもπερι-άπτωμα「身につける」の名詞形περίαμμαという「お守り」もあるから、βάσκανος, προ-βασκάνιονは意味的にも限定されていることがわかる。

このβάσκανοςという語の源は判然としない。ローマ時代に同じ目に関する「魔術」、あるいはそれを避けるための男根の形をした「お守り」をあらわす lat. fascinus/fascinumの起源をこのギリシア語とする学者がいたことを、ゲリウスは「アッティカの夜」Noctes atticae 16, 12のなかでふれている。この解釈は

あながち民間語源ともいえない魅力をもっているが、fascinusには形の上から fascis「束」との関係も否定できない。そのためにこのギリシア語の形には、早くからトラキア・イリュリア起源が唱えられてきた。しかしこれも仮説の域をでない。そこでgr. βάζω,あるいはφάσσω, lat. fāturなど「いう」という動詞形との関係も考慮されているが、意味の特殊化が説明できない。けっきょくこの形も魔術の語として、不透明な性格をもったまま、ローマ時代まで民衆の間に生きてきたことになる。<sup>(26)</sup>

この語に関連して、ヘレニズム時代のアレクサンドリアの詩人カリマコス Kallimachosの断片Aitia「原因」の序ともいべき「テルキーネスΤελχίνεςへの回答」のテルキーネス族についてもふれておこう。μέγα βιβλίον μέγα κακόν。「大著は大悪」という名文句を残したこの詩人は、大作をものにしないう自分を意地悪く非難する敵たちを、「詩の女神ムーサに親しくもなかったテルキーネスが、私の歌についてよくぶつぶついつている」と冒頭に述べて、敵をこの一族になぞらえている。この一族は、一説にはゴルゴーと同じくポントスとガイアの子といわれ、ロドス島に住む半人半魚、あるいは半蛇の魔ものとして知られている。彼らは冶金の技にすぐれ、「その目はにらむだけですべてのものを滅ぼしてしまう quorum oculos ipso vitiantes omnia visu」(オウィディウス「変身物語」Metamorphoses 7, 366)といわれた妖怪である。詩人はこの敵に対して「目の妖術の破滅をもたらす族は去れ ἔλλατε βασκανίης ὀλοὸν γένος」(17)と、*βασκανία*の使い手と表現している。

カリマコスの敵の一人とされているロドス島で活躍したアポロニオス Apolloniosも、叙事詩「アルゴ船物語」Argonautikaの終り近くで、メーディアの眼力を語っている。この船がクレタに寄港しようとしたとき、青銅の人タロスはその魔力によって、これを阻止しようとした。これに対して彼女は三度呪文を唱え、三度祈りを捧げた後で死霊や黄泉の国の犬たちをよび出し、邪悪な心を胸に抱き、「敵意にみちた目で ἔχθοδοποιῶσιν ὄμμασι 青銅人タロスの眼差しを幻惑した ὄπωπας ἐμέγηρεν」(1669-70)。これは一種の幻惑であり、怪人の眼力に対してメーディアが同じ目の魔力で機先を制したといえよう。

因みに、メーディアのように自らも目の魔力をもっているならば、相手のそれに対抗できようが、一般に人間はどうしたら敵方の「悪い目」をそらすことができるのだろうか。その手段として、古代社会では三度唾を自分の胸に吐くとよいという迷信があった。これもヘレニズム時代のシシリア生れの詩人テオ

クリトスTheokritosの、ホメロスのオデュッセイアに登場するポリュペーモスと海のニンフ、ガラテイアへのおかしな恋をテーマにした歌合せの終りに、つぎのような一節がある。「悪い目の魔力に惑わされないために、私は三度わが胸のなかに唾を吐いた。ὥς μὴ βασκανθῶ δέ, τρις εἰς ἐμὸν ἔπτυσσα κόλπῳν.これは老女コテュタリスが私に教えてくれたこと」(6, 39-40)。もっともこの三度唾を吐くという行為は、いろいろ悪霊を払うまじないとして広く行われていたらしく、アリストテレスの高弟として知られるテオプラストスTheophrastosも「人さまざま」Kharakteresの16章「迷信」deisidaimoníaの終りに述べている。「狂人やてんかんの人を見ると、震えあがって胸のなかに三度唾を吐く」。

これらの作家の時代のギリシア語の作品としては聖書があげられるが、ここでは「愚かなガラテア人よ、だれが(真実に従わないように)お前たちを幻惑したのかτίς ὑμᾶς ἐβασκανεν(ラテン訳quis vos fascinavit)」(「ガラテア書」3, 1)のように、βάσκανοςの動詞形がみられるし、この形容詞の使用も認められる。しかしプルタルコスにみられたような、これと「目」との結合はない。代りに近代語のevil eye, mauvais oeil, böser Blick (Schalksaug)に通じるὄφθαλμός πονηρός(Mth. 6, 23; 20, 15, Mc. 7, 22, Luc. 11, 34)という文字通り「悪い目」という表現があり、ὄφθαλμός ἀπλοῦς「一重の目」(Mth. 6, 22; Luc. 11, 34)と対比されている。そのラテン語訳はoculus malusとoculus simplexである。例えば、マルコ傳7, 21-22では、人の心のなかからでてくる「悪い考え」οἱ διαλογισμοὶ οἱ κακοί (lat. malae cogitationes) が列挙されて、盗み、殺人、姦淫、妬みなど並んでὄφθαλός πονηρός「悪い目」があげられている。これについてマタイ傳6, 22-23節は、つぎのようにいう。ὁ λύχνος τοῦ σώματός ἐστιν ὁ ὄφθαλμός. ἐὰν οὖν ᾗ ὁ ὄφθαλμός σου ἀπλοῦς, ὅλον τὸ σῶμά σου φωτεινὸν ἔσται. ἐὰν δὲ ὁ ὄφθαλμός σου πονηρός ᾗ, ὅλον τὸ σῶμά σου σκοτεινὸν ἔσται。「身体の光は目である。そこでお前の目が一重であれば、お前の全身が明るいだらう。お前の眼が悪ければ、お前の全身は暗い」。この場合「悪い目」とは、「一重の」との対比からも明らかに倫理的な意味を帯びている。従って、それによって人を幻惑する魔力をもったβάσκανοςよりこの「悪い目」のほうが意味が広いから、πονηρόςが選ばれたと考えられる。因みに、Lat. oculus simplex / malusにたいして古教会スラヴ語訳はoko prosto / lokavo, ウルフィラのゴート語訳はaugo ainfalo / unsel, ルターはauge einfeltig /

schalckとしている。

この聖書の「一重の」目という表現に関連して、ローマの大学者プリニウスの「博物誌」*Naturalis historia*につきのような記述がある(7, 16-18)。一人の人間が両性をそなえている*androgyni*という変った種族のことで、アリストテレスによると、右の胸が女で左が男というものがあるという。そしてある作家の報告では、アフリカに魔法を使う一族*familias quasdam effascinantium*がいて、彼らは牧場を干上がらせたり、木を枯らせたりしたが、同じような人々がバルカン半島のトリバリTriballi人やイリュリア人の間にもいるという。「彼らはみただけで魔法をかけてしまうし、長くみつめていると、とくに怒った目でみつめていると、その相手を殺してしまう。*qui visu quoque effascinent interimantque quos diutius intueantur, iratis praecipue oculis*。彼らの悪い(目)を大人は感じやすい。とりわけて特徴的なのは、彼らはどの目にも二つの瞳をもっていることである。*pupillas binas in singulis habeant oculis*」。プリニウスはさらに続けて、この種のふしぎな力をもつ人たちはスキタイの女性たちにも、また黒海周辺の部族のなかにもいるという報告をあげた後で、ローマの作家としては、キケロの言葉として、「二つの瞳をもつすべての女性は、その眼差しによってどこでも害をあたえる*feminas quidem omnes ubique visu nocere quae duplices pupillas habeant*」と書いている。

この二つの瞳をもつ女というのはいささか怪物めいているが、ローマでも人々の間に「悪い目」を恐れる習慣はあったし、これに唾を吐くというまじないも信じられていた。エトルリア生まれの詩人ペルシウスPersius Flaccusの風刺詩に、つぎのような一節がある。「ほら、おばあさんかおばさんが神様を恐れて、小さな男の子を揺りかごからだしてしまった。そして額とよだれで濡れた唇を、まずあの(中)指とお清めの唾によって汚れをはらう、怪しく燃える目を抑えることに長けている女は*urentis oculos inhibere perita*」(2, 32-34)。ここで「怪しく燃える目」というのは、「悪い目」であり、「あの(不評の)指で、*infami digito*は、中指がとかく男根など卑わいなものをあらわすのに使われるところから、同時に「悪い目」に対するお守りの指とされていたので、唾とともにあげられたわけで、ローマの迷信のあらわれである。

さきに*gr. βάσκανος*との関係が推定されているラテン語の語彙として*fascinus*、あるいは*fascinum*という形に言及したが、その動詞形(*ef-*)*fascinō*は既述のプ

リニウスの引用文のなかにも認められる。これが「目」ととくに関係があると思われる例として、ウェルギリウスVergiliusの「選歌」Eclogaにみられる一節をあげておこう。これは、やせて元気がない家畜を世話する牧人の言葉である。nescio quis teneros oculus mihi fascinat agnos. 「いかなる（悪い）目が私の若い羊たちに魔法をかけているのか、私は知らない」（3, 103）。この動詞の基になったfascinus / fascinumは、魔法であると同時に、それに対する魔除けの「お守り」にも用いられている。これは男根の形をしたもので、首にかけたらしく、プリニウス（「博物誌」28, 39）もこれに言及している。それによると、み知らぬ人がきたときとか、眠っている幼子がみられたときには、乳母が三度唾を吐くのがよいと思うのだが、このfascinusのお守りが心遣いをして守ってくれるのは、幼子ばかりではない。將軍たちについても、彼らが勝利の式の列の車にこれをかけておくと、このお守りが医者として彼らを嫉妬から守ってくれると著者は書いている。迷信とはいえ、男根の形をしたfascinusは「悪い目」の脅威に対抗する力を象徴する守り神のようなものであったといえよう。その源はなんであれ、この形とβάσκανοςとの関係はつながっているに違いない。

小アジアのヒッタイト語族にも、この「悪い目」idālawā IGI. HI. A-wa (hitt. šakuwa, n. pl.) は、悪い人、言葉、夢などとともに意識されていて、その魔力 (hitt. alwanzalar-, 動詞alwanzahh-) によって不妊になったり、ぶどう園が不作になってしまったという記録が待えられている。<sup>(27)</sup>この王国の王に仕える軍人の誓いの言葉にも、敵意の眼差しについてつぎのような表現が残っている。「この誓いを破り、そしてハッティの国の王に対して危険に振舞い、そしてハッティの国に敵意をもってKÚR-liその目をむけるIGI. HI. A-wa da-a-i者を、この誓いはとらえ、そして彼の軍隊の目をつぶしてしまえda-šu-wa-ah-ah-ha-an-du。そして彼らの耳をきこえないようにしてしまえ。<sup>(28)</sup>

このように「目」は祖語のものと思われる\*Hok\*-の対応形のほかに、各語派が独自の形をもっていて、「悪い目」の恐ろしさを伝えている。そこに古代の人々の目に対する恐怖が感じられ、タブーが生れる。目はそれだけ他の五感にくらべてすぐれているし、重要だからである。それは外から刺激をうけて働くばかりでなくて、自ら体内より光を相手にあたえる力をもっていると信じられ

ていた。目は対象に光りをあたえてその正体を明らかにするし、善悪を移すこともできるという信仰も、そこに生れてくる。そこで目は太陽と同じく光りをあたえる生命の象徴であり、生気を直接に伝えることができる器官のように思われていた。古代のインド人は、太陽神サヴィトリ Savitrī こそ我々に目をあたえてくれた神であると信じていた。Cākṣur no dhehi cākṣuṣe cākṣur vikhyaī tanúbhyaḥ / sárñ cedám ví ca paśyema // 「(サヴィトリ神は) 我らの目に目(の光)をcākṣurもたらせ、身体にみるための目(の光)を。我々はこの(世界)をくまなくみて、識別したい」(RV 10, 158, 4)。だから頭が**毘**体の主たるものであると同時に、sarvendriyānām nayanam pradhānam 「目はすべての感覚のなかで主たるものである」(Indische Sprüche 6932, 6959)と、くり返し説かれている。また目は顔の中心にある。そこでしばしばものの中心に譬えられる。父の復讐のために父殺しの下手人である母を追う血まみれのオレステスを、コロスの長は「館の目が破滅に倒れないように ὀφθαλμῶν οἴκων μὴ πανώλεθρον πεσεῖν」(アイスキュロス「供養する女たち」Khoephoroi 934)とよんでいる。

目の光を失うことは死を意味する。ホメロスは死の場面に、いく度もつぎのような表現を使っている。τὸν δὲ σκότος ὄσσε κάλυπεν, / ἤριπε δ', ὡς ὄτε πύργος, ἐνὶ κρατερῇ ὑσμίνῃ. 「暗闇が彼の目をおおい、塔の(倒れる)ように、激しい戦いのなかでどうと倒れた」(II, 4, 461-62)。またより詩的に、死と目が歌われるときもある。αἱματόεσσα δὲ χεῖρ πεδίῳ πέσε· τὸν δὲ κατ' ὄσσε / ἔλλαβε πορφύρεος θάνατος καὶ μοῖρα κραταιή. 「血まみれの手は地面におちた。深紅の死と力ある運命が彼の目をとらえた」(II, 5, 82-83)。この詩人の言葉通り、死は目を閉じて光を失うことにほかならない。その意味でギリシア人は、しばらくとはいえ光のない世界におちる眼りを、死の兄弟ととらえていた。黄泉の国の王で、ペルセポネーの夫ハーデース Hades (Haides) を、ギリシア人は「みえないところ(に住む)」, つまり a-id-<\*a (否定辞) -wid- 「みる」と理解していた。これは正しく目の光を失ったものたちの世界である。<sup>(29)</sup> だから死者をよびもどすには、まず目の回復が必要である。リグ・ヴェーダの終りに近く、死者の霊をよび返そうとする歌のなかで、詩人は ásuniti- 「靈魂を導くこと=死神」にむかって、死者のためにその切実な願いをつぎのように歌っている。ásunite púnar asmásu cākṣuḥ púnah prāñám ihá no dhehí bhógam / jyók paśyema sūryam uccárantam ánumate mṛḍáyā naḥ svastí // 「靈魂

を導くものよ、再び我々に目を、再び呼気を、ここに味わいを返せ。さらにながく我々は太陽が登るのがみたい、満月の夜の神よ、我々の幸いに恵みあれ」(RV 10, 59, 6)。

## 《註》

- (1) M. Mayrhofer: Etymologisches Wörterbuch des Altindoirischen, Bd. 1, Heidelberg 1992, 42f.; K. Hoffmann- B. Forssman; Avestische Laut-und Flexionslehre, Innsbruck 1996, 133, 134. このイラン語のav. aši-<\*axšiにはušī-「耳」の影響が考えられる。
- (2) J. Wackernagel-A. Debrunner; Altindische Grammatik, Bd. 3, Göttingen 1930. 51f. §19Ca, 304f, §158Ca; Chr. Bartholomae の Altiranisches Wb, 229の扱いに倣ってR. S. P. Beekes: A Grammar of Gatha-Avestan, Leiden 1988, 114でも, aš-を-i-でなくて-š-語幹で示している。
- (3) A. Meillet: Études sur l'étymologie et le vocabulaire du vieux slave, Paris 1905, 358.
- (4) A. Meillet - A. Vaillant: Le slave commun, Paris 1934, 420.
- (5) R. Schmitt: Grammatik des klassisch-Armenischen, Innsbruck 1981, 50, 64, 106; G. R. Solta: Die Stellung des Armenischen im Kreise der indogermanischen Sprachen, Wien 1960, 20f., 54f., なおアルバニア語のsyにも同じ可能性が考えられる。M. E. Huld: Basic Albanian etymologies, Los Angeles 1983, 113.
- (6) A. J. V. Windekens: Le tokharien confronté avec les autres langues indo-européennes, vol. II/1 le morphologie nominale, Louvain 1979, 237; D. Q. Adams; Tocharian historical phonology and morphology, New Haven 1988, 137.
- (7) E. Schwyzer: Griechische Grammatik, Bd. 1, München 1953, 319, 565; M. Lejeune: Phonétique historique du mycénien et du grec ancien, Paris 1972, 46, 105. Lejeune は\*-iは-eの前でyになることを認め, ὄσσεは\*ok\*<sup>i</sup>のréfectionとしている ; F.O. Lindeman: Introduction to the 'Laryngeal Theory', Oslo 1987, 60.
- (8) B. Forssman: Nachlese zu ὄσσε, MSS 25 1969, 39-50; H. Rix: Historische Grammatik des Griechischen, Darmstadt 1976, 75, 160.
- (9) E. Benveniste: Origines de la formation des noms en indo-européen, Paris 1935, 48; M. Mayrhofer : Ergebnisse einer Überprüfung des indogermanischen Ansatzes „Thorn“, Wien 1983 (=AÖAW 119 240-255) 243; ib. Indogermanische Grammatik Bd. 1. Heidelberg 1986, 157.
- (10) H. Kronasser: Vergleichende Laut-und Formenlehre des Hethitischen, Heidelberg 1956, 65; W.P. Lehmann: A Gothic etymological dictionary, Leiden 1986, 291. 「ついでいく」から「みる」, 「目」への推移は, 狩の場合における「目で追う」という意味の仮定によって説明されてきた。
- (11) H. Kronasser (註10) 67. ただしこの動詞は, 英独語のseek, suchen, goth. sokjan, lat. sāgiō「感じる」, gr. ἡγέομαι「導く」との対応が一般に認められている。
- (12) E. H. Sturtevant-E. A. Hahn : A Comparative Grammar of the Hittite Language, vol. 1, New Haven 1951, 66. J. Kurylowicz: Le hittite, Proceedings of the VIII International Congress of Linguists, Oslo 1958, 216-43の226では, s-movableとはいわずに, hitt. šankuwai-「爪」に対する\*onghwi- (lat. unguis)の関係はhitt. sakuwa-と\*Hok\*-のそれに等しいとしている。

- (13) N. Oettinger: Die Stammbildung des hethitischen Veroums, Nürnberg 1979, 395f., 412f.。  
なお母音の長短などヒッタイト語の形についての違いは著者の解釈によるものである。  
また段階(1)の語尾 *iH* の *H* を 2 とするのは 1 の誤りであろう。
- (14) J. Vendryes: *Lexique étymologique de l'irlandais ancien*, RS, Paris 1974, S-201; この形の弱階梯には *H* の *metathesis* を予定する。M. Mayrhofer (註 9, 1986) 174f.
- (15) 「目」と「太陽」の結びつきについては, J. Gonda: *Eye and gaze in the Veda*, Amsterdam 1965, 6 n. 16.
- (16) 拙著「ことばの身体誌」東京1990, 173。なお古アイルランド語の「太陽」は *grían* <\**ghreina* という, 英独語の *gray, grau*, ロシア語の *zret* 「みる」; に関係のある形が用いられている。
- (17) O. Szemerényi: *Principles of etymological research in the Indo-European languages*, II Fachtagung für indogermanische und allgemeine Sprachwissenschaft. Innsbruck 1962, 175-212 の 191f.
- (18) A. Meillet: *Quelques hypothèses sur des interdictions de vocabulaire dans les langues indo-européennes*, *Linguistique historique et linguistique générale* 1, Paris 1921, 281-91 所収の 288f.; W. Havers: *Neuere Literatur zum Sprachtabu*, Wien 1946, 59f.
- (19) この2つの名詞については *Mayrhofer* (註 1) 777f.
- (20) *Mayrhofer* (註 1) 523, 524に, この形に関する *M. Leumann, J. Narten* などの解釈が言及されている。次節に引用する *RV* 2, 39, 5 *akṣi cākṣuṣā* の *cākṣuṣā* も, 完了分詞の両数形主格として「みたる目」ととるか (*Grassmann*), あるいは拙訳のように *cākṣuṣ-* の単数具格ととることができる (*Geldner, Renou EVP* 16, Paris 1967, 32)。
- (21) J. Gonda: *The Medium in the Rgveda*, A. Leiden 1979, 14f. で著者は, この「みる」働きと中動態の関係をとらえている。
- (22) この歌については *J. Gonda: Notes on the AV Samhita Book 14*, *IJ* 8, 1964, 1-24 の 10f.; *ib.* (註15) 5, 33, 59, なお *skr. ghorām cākṣus* に当たるイラン語派の形としては *av. ayaši-* (*Bartholomae Wb.* 48) がある。これは *aya-* (:*skr. aghá-* 「悪い」) と *aši* の合成形である。
- (23) 辻道四郎: *ヴェーダ学論集*, 東京1977, 306。
- (24) H. Zimmer: *Altindisches Leben*, Berlin 1879, 65f.
- (25) ケルト語派でも古アイルランド語に *birach-derc* 「針の目をもつ」という形容詞が, その神話に登場する巨人 *Balor* のあだ名にあてられている。この *-derc* も \**derk-* 「みる」に属する形とされている。この恐ろしい目をもつ巨人は, *Net* とよばれる軍神の孫で, その破壊力のためにいつも目を閉じたままでいたが, *Lug* 神の怒りをかっただめに, この神によって目に石をなげこまれたという。J. Vendryes: *Sur les verbes qui expriment l'idée de voir*, *Choix d'études linguistiques et celtiques*, Paris 1952, 115-126 の 122; *ib.* (註 14) B. Paris 1981. B-52; J. de Vries: *La religion des celtes*, Paris 1963, 159。
- (26) A. Ernout-A. Meillet: *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, 4. ed., Paris 1959. 218; P. Chantraine: *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*, Paris 1980, 167; M. P. Nilsson: *Geschichte der griechischen Religion*. Bd. II. München 1961, 522.
- (27) A. Goetze: *Kulturgeschichte Kleinasiens*, 2. Auflage, München 1957, 154; J. Puhvel: *Hittite Etymological Dictionary*, vol. 1-2, Berlin 1984, 43f. (*alwanzatar-*), 489 (*idalawa*).
- (28) N. Oettinger: *Die militärischen Eide der Hethiter*, Hiesbaden 1976, 6-7, 25, Vs. 1, 21-26.
- (29) 拙著「ことばの生活誌」東京1987, 300f.

## ‘Das Auge’ im Indogermanischen

K. Kazama

Das Auge ist der wichtigste der fünf Sinne. Ohne Augenlicht wird es sofort finster. Wir erinnern uns an die Tragödie vom König Oedipus, der als Sühne für den Vatemord beide Augen mit eigener Hand verlieren musste. In der alten lichtarmen Welt glaubten viele Leute, dass das Auge wie die Sonne strahlt und Gut von Böse unerscheiden kann.

Im Indogermanischen gibt es ein Wort für das Auge, das als \*Hok\*-rekonstruiert worden ist. Wir haben die Entsprechung von Formen der verschiedenen Stämme gesucht, aber sie scheint nicht genau übereinstimmt zu sein. Wie veränderte das Wort sich so unregelmässig? Schon lange strebte A. Meillet danach, den Grund aus dem Aberglauben und Sprachtabu des mauvais œil zu erklären. Der Sprachtabu ist tatsächlich nicht leicht zu beweisen, insbesondere durch Texte der toten Sprachen.

In diesem kleinen Aufsatz hat der Verfasser zunächst das Problem der vorausgesetzten Dualform von \*Hok\*- erörtert und dann die interessanten Tatsachen des bösen Blicks mit vielen Beispielen gezeigt.